人を笑わせることの考察（三）　　伊藤浩睦

人を笑わせよう、人に笑わせてもらおうと考えたことのない人は、人を笑わせるという作業をとても簡単なものだと思っています。バカがバカを言っていれば笑いなど取れる、子どもの悪ふざけ程度のことをやっていれば笑いは取れるといった程度の認識なのです。

しかし実際には違います。人間は怒らせるのが最も簡単で、次が泣かせ、笑わせるのが最も難しいのです。

人を笑わせることの面白さを初めて文芸として記録した「竹馬狂吟集」や「犬筑波集」を読むと、作り手が随分と苦労しているようすが窺えます。

霞のころも裾は濡れけり
佐保姫の春立ちながら尿をして

ふぐりのあたり善くぞ洗わん
昔より玉磨かざれば光なし

玉を吊り緒の青柳の絲
春風にふらめきわたる松ふぐり

「犬筑波集」のなかでも傑作の句ですが、霞と玉は、風雅を卑俗に落としています。ふぐりは格言を卑俗の説明に使っています。この場合の風雅は、和歌や連歌のなかで確立された権威であるといえます。格言も世間的には権威です。それをふぐり、尿という卑俗なものに落とす。それによって笑いが生まれてきます。

単にふぐりを連呼しても、それで笑いが取れるというものではありません。駄洒落であれば、そこに捻りがないと笑いにはなりません。その辺りを間違って滑っている句もたくさんあります。入集しているのでも滑っている句があるのですから、出来の良い高座に当たるのが例外的なように、傑作句に当たるのは

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

例外的なものであったのかも知れません。

権威を卑俗に落すのが大笑いが取れる基本ですから、権威をひたすら有難いものだと思っている人たちは、笑わせるという行為を嫌っていると考えても良いのではないでしょうか。

俳諧のように文字による笑いは内容が常に新鮮であることが求められます。言葉による笑いは内容が分かっていても、話術が巧みであればそれで笑いが取れますが、文字によるものは内容が前に出たものと同じでは参加者は笑ってくれません。

常に新鮮な内容のものを出し続けるのは不可能です。権威の落としも、卑俗な言葉も、やっているうちにパターンが出尽してしまいます。みんなで、分かり切っている同じ滑稽句を言い合っていて、面白いはずがありません。そこで「守武千句」が登場してきます。

一句や、付句的な二句だけの読み捨てではなくて、俳諧で連歌と同じように百韻を付けようとする試みが「守武千句」です。一回限りのものとして権威を卑俗に落すのではなくて、付け合いをすることにより、付筋や全体を通しての物語性にも滑稽の要素を持たせることによって、中世から近世の人たちは、笑わせるという作業を継続してきたのです。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。